

今月の農業情報

尾張

都市近郊の直売に取組む卵鶏農家3戸で飼料用米利用が定着

とき 平成30年12月～

ところ 瀬戸市、犬山市、稲沢市

平成28年度より瀬戸市、犬山市、稲沢市でそれぞれ取り組んでいる、採卵鶏農家と水田作農家による飼料用米取引（計20t）が今年度3年目を迎えました。採卵鶏農家は積極的に利用するようになり、水田作農家も需要に合った生産に理解を示しており、取組が定着してきました。

尾張管内では、小規模ながら、消費者へ直接鶏卵を販売する養鶏農家が9割と多く、平均直売比率は約50%と高くなっています。

これまで、輸入飼料価格の高止まりによる国産飼料の需要の高まりを背景に、農業改良普及課が採卵鶏農家と水田作農家のマッチングを進めてきました。飼料用米は、飼料コストの低減、地元産の飼料を給与していることが消費者へのPRにつながることから、採卵鶏農家では積極的に取り組む姿勢が見られ、飼料用米の利用促進につながりました。飼料用米への馴致の必要性や、飼料用米を給与することにより、卵黄色が薄くなるなどの変化があることから、普及課は適切な給与方法や配合割合について指導してきました。3戸の採卵鶏農家は飼料用米利用に意欲的であり、今後も特色ある鶏卵生産の手法として継続していく意向があります。



【納品された30年産飼料用米】

海部

れんこん産地協議会設立される！～10年先の産地を考える～

とき 平成31年2月6日（水）

ところ 愛西市

J A あいち海部管内のレンコン栽培農家42名と、愛西市、J A、経済連、海部農林水産事務所等関係機関で組織する「れんこん産地協議会」が2月6日に設立総会を開催しました。当協議会は、特産品であるレンコンの生産性向上、ブランドの定着を図り、10年先を見据えレンコン産地の発展を目指すものです。

レンコン栽培は農家の高齢化、後継者不足により担い手や作付面積が年々減少傾向にあります。こうした現状を打開し、将来を見据えたレンコン産地の再構築を図るため担い手を中心に行政、団体が一堂に会する「れんこん産地協議会」が設立されました。活動内容は①優良品種の導入、育成、②新技術導入による生産性の向上③新規就農者定着のための研修受け入れ先の確保やほ場の斡旋、④規模拡大意向農家へのほ場集約や法人化、雇用促進等、生産基盤の拡充、⑤泥付き、洗いレンコン等出荷方法の検討による高いブランドイメージの定着といった課題を検討します。

設立総会では、協議会の規約や事業計画、役員を選任が審議され全て承認されました。来賓として招かれた愛西市長やJ A あいち海部組合長からは協議会活動への期待や積極的なバックアップが述べられました。役員には若い生産農家も選任され、若い声を協議会へ反映させる意図が伺えました。農業改良普及課は、優良品種の選定や省力防除技術の導入など、協議会と連携をとり活動を進めていきます。

と き 平成31年1月26日（土）

ところ レストラン「Farm&」（半田市内）

知多4Hクラブ連絡協議会は、地元食材にこだわったレストラン「Farm&」で男女交流会を開催しました。一般募集参加した20～30代の女性15名と交流し、知多半島の農業の豊かさと若手農業者の魅力を感じてもらうことができました。農業改良普及課は、4Hクラブ員が自主的に活動できるよう企画・運営を支援しました。

4Hクラブ員が、自分たちが作った自慢の食材（米、豚肉、キャベツ、ハクサイ、キュウリ、トマト、ミカン、ポンカンなど）を提供し、「Farm&」のシェフが鮮度と良さを活かし調理したおいしい料理を味わいながら、交流を深めました。また、花を栽培している4Hクラブ員が、ユリやストックの切り花、ビオラ等の寄せ植えで会場を華やかに飾りました。会場内は会話が絶えず、男女とも楽しい時をすごせたようでした。

開催に当たっては、内容の企画、レストランとの交渉、提供する食材選び、PR方法、参加女性の募集など、クラブ員が工夫を凝らし、積極的に行いました。



【料理を楽しみながら交流】



【花で飾られた会場内】

と き 平成31年2月13日（水）

ところ 西三河総合庁舎（岡崎市明大寺本町）

今年度から始まった愛知県GAP認証に管内から申請のあった3件すべてが認証され、西三河農林水産事務所において、2月13日に認証書交付式を行いました。ケーブルテレビや新聞の取材がある中で、認証取得者が、GAP認証を目指した動機や抱負など思いを語りました。

岡崎市でブドウ狩り園を経営する岡田益夫さんは「ブドウ狩りをお客様に安全に楽しんでもいただくためにGAPに取り組んだ。息子に経営移譲をしつつあるが、安全安心の取組も継承したい。」と今後の抱負を語りました。

岡崎市でブドウの直売経営をしている伊藤隆さんは「新規参入でブドウを栽培しているので安全安心への取組で差別化できればと考え取り組んだ。東京オリンピック・パラリンピックへの出荷もしたい。」と語りました。

71名での団体申請を行った西尾茶愛知県GAPの会、稲垣拓康会長は「人数が多いため去年の春頃から担当普及指導員に教えてもらいながら準備をしてきた。世界の人に西尾の抹茶を飲んでもらえるよう、より安全安心な生産に努めます。」と語りました。今後さらに多くの茶生産者が愛知県GAP認証に加わる予定です。



【記念撮影の様子（左から岡田氏、伊藤氏、西尾茶愛知県GAPの会）】

とき 平成30年1月30日（水）

ところ 豊田市農ライフ創生センター（豊田市四郷町）

農業改良普及課は、農家女性の想いを農業分野への施策に活かすため、農村生活アドバイザー、豊田市、みよし市、JA あいち豊田による農政懇談会を開催しました。懇談会では、農村生活アドバイザーから、農業経営の向上対策や、獣害・耕作放棄地対策などについて提案や要望を出すなど、出席者全員が発言しました。豊田市、農協からは「情報を共有することで新たな施策にも反映させたい」との返答があり、有意義な時間となりました。



【農政懇談会の状況】

当日は、管内の農村生活アドバイザー13名と関係機関の総勢22名が出席しました。内容は、①担い手確保を目的に次年度設置予定の豊田市農ライフ創生センター「桃・梨専門コース」に関する説明と、②農政懇談会の2部制で行われました。今回は、農ライフ創生センターで開催し、農村生活アドバイザーがセンターの新たな取組みについて理解を深めたり、農政懇談会にセンター所長に同席してもらうことで、担い手確保の体制について関係者間で意思疎通を図ることができました。

農業改良普及課は、役員会にて懇談会テーマの検討や会員への意見照会等について支援し、今後は、恒例化した行事となるよう誘導していきます。

とき 平成31年1月11日（金）

ところ JA愛知東 北設営農センター（設楽町津具）

JA愛知東トマト部会津具支部のヤシがら培地栽培の農家は、収量の向上を目的に、自らの給液に関するデータを開示し他者と比較して理想的な給液方法を模索するため、情報交換会を開催しました。農業改良普及課は、あらかじめ生産者ごとの月別給液データ、栽培の課題及び実施した対策をとりまとめて示しました。農家はこれらを基に活発に意見交換を実施しました。



【情報交換会の様子】

JA愛知東トマト部会津具支部のヤシがら培地栽培の農家数と平均収量は、5戸・10.7t/10aであり、設楽支部2戸・13.5t/10a、作手支部7戸・17.2t/10aと比べて単収が低いことが課題です。情報交換会は、津具支部が更なる収量向上を目指す目的で開催しました。農家は、農業改良普及課がとりまとめた給液データなどの表を基に「夏秋栽培に適した定植から収穫開始までの給液管理ができれば収量向上に繋がるのではないか」、「他支部の農家と話すれば栽培の参考になるのではないか。」など活発に議論を行いました。

この会ののち、他支部との情報交換会の開催が決定するなど、農家は今後も栽培について情報を交換したいとの思いを強くしています。農業改良普及課は、ヤシがら培地栽培における収量向上のため引き続き支援していきます。

と き 平成31年1月10日（木）

ところ 豊川市三上町

あいちの花き輸出実行委員会主催で、5か国の花き海外バイヤー6人による、豊川市のガーベラとバラのほ場視察が行われました。海外バイヤーは、ガーベラの花の品質の高さや、バラの品種特性に合わせた切り前の細かな調整に高い関心を示しました。対応したバラ生産者は、「今回のような機会が増えれば海外輸出につながるのでは。」と感想を述べていました。

産地視察は、中国、シンガポール、フランス、ドイツ、オーストリアの花き海外バイヤーが参加しました。

バラの視察では、生産者が当日採花したバラをバイヤーの前に並べ、品種毎の特徴を説明しました。バイヤーから「品種によって蕾の開き具合が異なるのはなぜか？」との質問に、「品種によって開花の早さが異なるので、早く咲く品種は少し蕾の状態、逆に遅い品種は少し花が開いた状態で出荷する。」と答え、バイヤー達は細かな対応に感心していました。



【採花のタイミングを説明するバラ生産者】

と き 平成31年1月18日（金）、28日（月）

ところ 田原市

管内には、県のあいち型植物工場推進事業を活用して勉強会やほ場巡回を行い、環境制御技術の向上に取り組む輪ギクの産地グループが7つあります。1月は冬季の生産性向上が最も必要な時期であるため、農業改良普及課が働きかけて全グループで勉強会を開催しました。このうち、炭酸ガスの効果的な施用方法を検討した事例を報告します。

「輪菊プロモニG」は1月18日に勉強会を開催しました。技術の実証・普及事業で取り組んでいる炭酸ガス局所施用ほ場と、会員が行っている局所LED補光を視察しました。その後座学で炭酸ガス濃度調査や生育調査を踏まえた施用効果の検討を行いました。

「あぐりログG」では28日に、メンバーの1月開花ほ場の視察後、炭酸ガスの施用方法について意見を交換しました。12月から1月は草勢が弱いため積極的に施用しますが、2月以降は草勢が強くなるため花芽分化期や破蕾期以降は施用量を少なくするという意見が多く出ました。

輪ギクでの炭酸ガス施用は全国的にみても事例はあまり多くなく、どちらのグループも手探りで進めています。農業改良普及課は緻密なデータ解析などにより、上位階級の発生率の向上やロス率の低減を目指して取り組んでいきます。



【環境制御ハウスで意見交換】